



発行日 2012年8月20日 発行人 細川正善

編集責任者 廣澤道秀 編集担当 佐藤慧真

発行所 SOTO 禅インターナショナル事務局 〒233-0012 神奈川県横浜市港南区上永谷 5-1-3 貞昌院内

Tel. 045-843-8852 Fax. 045-843-8864 URL: <http://www.soto-zen.net/>

郵便振替 00100-6-611195 SOTO 禅インターナショナル

Vol.50

会報50号記念号



巻 頭

僧堂安居の充実発展を願う

大本山總持寺副貫首 最乗寺専門僧堂堂長 いし つき しゅう こう
石 附 周 行

拙衲は、日々専門僧堂の堂長として安居者と起居を共にしています。掛搭僧の多い年もあり少ない年もあり、更には安居者の年齢層が片寄ること等もあって変化に豊んだ一期一会でもあります。

特に最近では安居者の修行期間が短縮傾向にあり、宗門が定める二等教師補任に見合う資格を前提に考えて上山する者は、大学卒か短期大学卒で6ヵ月から1年弱で送行する事例が多くなっています。上山して瞬く間となります。

この期間に宗門人としての宗教的儀礼に携える立派なお坊さんにと、師寮寺で期待される宗侶の排出には難題が多くのかかります。ましてや、宗教的儀礼どころか簡事究明の僧堂安居の根幹に於いては、本人の僧歴や面目に相異があり、大きな課題を担うこととなります。

海外からの安居者を受け入れたこともあります。坐禅を中心に考えられての上山の方、母国で坐禅道場を将来開設する

ため資格を想定されての方など、多岐でありました。

更に、海外からの問合せの中で、「日本の僧堂は坐禅中心の簡事究明で無く、修行という行持を中心とした宗教的人材養成で資格取得を目的としたものか？」との問い合わせもある訳です。

返答は中々難しいのですが、「直ぐ役立つお坊さん教育」を望む師寮寺が多いこと、本人からすると、お経が立派に読めて進退作法が身に付くことが即、宗侶と考えていることです。「宗門人として教団の一員としての宗教的儀礼を第一とし、簡事究明はそれに伴って不断に精進する日々の行法の中に不即不離に備わってくる。」と受け止めているのでしょう。

このような現状であって、安居を長くする者や一度は海外や他の僧堂へ移っても、再安居としてくる者もいます。僧堂の教育方針は古参の者が新到和尚の指導に当ることとなっていますから、良き古参和尚の層を厚くすることが僧堂充実の要となることを願っているところであります。

特集 SZIのこれまでとこれから(1)

SZIタイムライン

～発足20周年に向かい、これまでの活動を振り返ってみます～

来年2月、SOTO禅インターナショナルは1993年2月の発足以来20周年を迎えます。現在、国際布教の状況も発足当時より変化いたしており、SZIにもハワイ・北米・南米・ヨーロッパ、それぞれの教化の成果を踏まえた変化の上に展開されるべき新たな時代が訪れようとしております。

本会報につきましても、第1号発刊の1993年10月15日以来、今号にていよいよ50号を記念いたすこととなりました。そこで今号は20周年という大きな節目に向かうに辺り、特集を「SZIのこれまでとこれから」といたして、まず歴代スタッフの活動について写真と会報の主なコンテンツを追っていくことにより、振り返ってみたいと思います。



1993.2.28 SOTO禅インターナショナル設立総会



1994.6.2 平成6年度総会・講演会



1996.6.12 聖護寺国際安居



1995.5 総会・講演会

Vol.1 (1993年10月15日)

特集 国際化の中の曹洞宗を語る「釈尊の説いた教化の条件」奈良康明 駒澤大学教授／海外寺院便り サンフランシスコ桑港寺 細川正善師、ハワイ・カウアイ禅宗寺 三好晃一師、ミュンヘン直心庵 中川正寿師

Vol.2 (1994年4月15日)

巻頭「開教をふりかえり」大本山總持寺後堂 大山興隆師／「異文化コミュニケーションの確立を」采川道昭師／「アメリカに見る宗教活動の一風景」五十嵐卓三師

Vol.3 (1994年11月15日)

巻頭 大本山永平寺監院 南澤道人師／特集 シンポジウム「今問われている平和と曹洞宗の国際化」／「第8回世界宗教者平和の集い」に参加して 峯岸正典師

Vol.4 (1995年3月15日)

ティック・ナット・ハン師を迎えて／三開教総監を囲んで／ネブラスカ禅堂開単をととして／ミネソタ宝鏡寺建立計画／ワンボールネットワーク・ミネソタ

Vol.5 (1995年7月15日)

巻頭 北米開教総監 山下顕光師／特集 ティック・ナット・ハンと共に／ワンドフルモーメント・清里

Vol.6 (1995年12月1日)

巻頭「ハワイの布教」／特集「ハワイ・北米檀信徒大会報告」／前角師本葬LAで厳修／南米別院本堂落慶法要／横山泰賢師アイオワへ

Vol.7 (1996年4月15日)

巻頭「教化者養成のみち」／特集「ブラジルの禅」南米イピラス仏心寺／ヨーロッパ ドイツ直心庵



1997.10.12～13 細川正善師の帰国慰労会と
「海外開教と開教師支援について」のシンポジウムを開催



1997.10.18
北米巡回布教でお褒姿を寄与される青山俊董老師



1998.9.28



2000.2.14 三好総監壮行会

Vol.8 (1996年9月1日)

巻頭「国際的な活動の架け橋に！」／特集 聖護寺国際安居参加レポート／サンフランシスコ禅センター／禅ホスピスプロジェクト事情

Vol.9 (1997年1月15日)

巻頭「日本の玄関としての總持寺」／特集 ハワイ・マウイ満徳寺90周年記念法要／仏教国際親善の旅レポート／「第10回世界宗教者会議平和の集い」参加レポート

Vol.10 (1997年7月15日)

巻頭「21世紀への提言」宗門人の果たすべき使命 大本山總持寺貫首板橋興宗／特集「北アメリカ開教75周年両大本山北米別院禪宗寺創立75周年報告／続・マウイ満徳寺創立90周年記念法要 仏教国際親善ハワイの旅レポート／シンポジウム「ハワイ布教を考える会」

Vol.11 (1997年12月20日)

巻頭「北米巡回布教を通して一問違いのない仏法を伝え、人の誓願のもとに」愛知専門尼僧堂堂頭 青山俊董／特集「北アメリカ布教の旅」に随行して 観音庵副住職 笹川悦導／イタリア「第11回世界宗教者会議平和の集い」

Vol.12 (1998年5月20日)

巻頭「21世紀の女性と仏教」駒沢女子大学学長 東隆真／特集 創立50周年講演録「禅修行を通して得られたもの…両鏡相照」長崎総合科学大学教授 ブライアン・パークガフニ師

Vol.13 (1998年11月20日)

巻頭「世界宗教者平和の祈り集会に寄せて」SZI会長 松永然道／特集 海外布教シンポジウムレポート—仏教東漸『異文化で育つ仏法』／「鈴木俊隆学会に出席して思ったこと」／ルーマニア「世界宗教者平和の祈りレポート」

Vol.14 (1999年5月10日)

巻頭「開教の支えとなって」宗務総長 乙川良英／特集 世界最大の経蔵ブッダモントン 今世紀最高の偉業南伝大蔵経の経蔵完成 横浜善光寺住職・日本パクナム会会長 黒田武志

Vol.15 (1999年8月10日)

巻頭「羅針盤を求めて」東北福祉大学学長 荻野浩基／SZIワークショップ「異文化理解」国立政策大学院教授 青木保／大学坐禅のこと パイオニアヴァレー禅堂堂長 藤田一照

Vol.16 (2000年1月30日)

巻頭「道元禅師シンポジウムを終えて」北アメリカ開教総監 秋葉玄吾／特集 道元禅師シンポジウム

Vol.17 (2000年6月20日)

巻頭「SZIは何をすべきか」SZI会長 藤川亨胤／特集 総会講演会ダイジェスト「仏教の新たな可能性と異文化理解」一橋大学教授 足羽典志子／SZI総会レポート 北アメリカ開教総監・南アメリカ開教総監両師をお迎えして

Vol.18 (2000年11月15日)

巻頭「慕古の生活」瑞応寺専門僧堂堂頭 橋崎通元／永平寺ワークショップ「アメリカで生きる曹洞禅」ヴァレー禅堂堂頭 藤田一照



2000 ゆめ観音 阪神淡路大震災復興支援ブース



2003 SZI 10周年シンポジウム



2005 総会



2005.6.27 永平寺ワークショップ

Vol.19 (2001年4月30日)

巻頭「仏祖のこころ(慕古)を世界へ」大本山永平寺貫首 宮崎突保／特集 総会講演会ダイジェスト「宗教者、その国際性と、その必要性」横浜市東林寺住職 瀧田光久／「ゆめ観音in大船」アジアまつり報告

Vol.20 (2002年1月15日)

巻頭「祈りと願いをこめて」大本山總持寺貫首 板橋興宗／杉原千畝夫人講演会「六千人の命のビザ」／特集「SZIからの提言 アメリカ合衆国同時多発テロ事件によせて」

Vol.21 (2002年7月1日)

巻頭「駒大新学長に聞く」駒澤大学学長 大谷哲夫／総会講演会ダイジェスト「慕古の慶快に学ぶ」瑞応寺専門僧堂堂頭 榎崎通元／アメリカの仏教書

Vol.22 (2003年1月16日)

巻頭「多様な価値観を尊重しよう」駒澤大学名誉教授 佐々木宏幹／特集 曹洞宗国際交流会レポート

Vol.23 (2003年6月25日)

巻頭「発菩提心」ハワイ国際布教総監 町田時保／特集 SZI 10周年記念シンポジウム・ハワイ開教100年—現状と未来

Vol.24 (2003年12月25日)

巻頭「曹洞宗ハワイ布教100年に参加して」大本山永平寺副監院 松永然道／特集 曹洞宗ハワイ開教100年／曹洞宗北アメリカ国際布教80周年

Vol.25 (2004年5月31日)

巻頭「国際布教に思うこと」曹洞宗教化部長 宮川敬學／特集 SZI 総会レポート 討論1・国際布教支援積立金の活用について、討論2・国際平和について宗教者としてあるべき姿

Vol.26 (2004年8月4日)

巻頭「南アメリカ開教100周年記念行事に臨んで」南アメリカ国際布教総監 三好晃一／特集1 SZI 両大本山ワークショップ報告「アメリカの禪」／特集2 南アメリカ国際布教100周年／ブラジル禪光寺ユネスココムリキ賞を受賞



2006 ゆめ観音万灯供養



2006 永平寺WS町田宗鳳師



2007 總持寺WS小杭好臣師



2007 シルクロード音楽の旅 檜ホール

Vol.27 (2005年1月10日)

巻頭「重々無尽の縁」北アメリカ国際布教総監 秋葉玄吾／特集 北アメリカ桑港寺開創70周年・好人庵10周年／特集 南アメリカ開教100周年・伯国イピラス禪光寺創立30周年慶讃式典記念行事

Vol.28 (2005年5月31日)

巻頭「人・情報・縁 運動から行動へ S Z Iブランドの確立を目指して」S Z I会長 福島伸悦／特集 総会講演会抄録「情報化社会における宗教意識のハイパー化」國學院大學教授 井上順孝

Vol.29 (2005年8月15日)

巻頭「現代社会における道元禪」大本山永平寺監院 森嶺雄／特集「わたしはアメリカで坐禪をどう語ったか」(1) 米国パイオニアバレー禪堂前堂頭 藤田一照

Vol.30 (2005年12月15日)

巻頭「打坐の縁に導かれて」ヨーロッパ国際布教総監 今村源宗／特集「わたしはアメリカで坐禪をどう語ったか」(2) 米国パイオニアバレー禪堂前堂頭 藤田一照

Vol.31 (2006年4月25日)

巻頭「守・破・離」の国際布教 大本山總持寺後堂・禪カウンセリング研究所所長 野田大燈／特集 総会講演会「日本仏教はいかに世界貢献をなすべきか」東京外国語大学教授 町田宗鳳

Vol.32 (2006年8月20日)

巻頭「活動をととしてよろこびを伝える」南アメリカ国際布教総監 采川道昭／特集 日本の禪・世界の禪—在日34年の体験から—長崎総合科学大学教授 プライアン・パークガフニ

Vol.33 (2006年12月25日)

巻頭「国際布教への願い」曹洞宗教化部長 瀧澤和夫／特集1 両大本山ワークショップ報告「僧侶として、宗教家として、人として」／特集

2 ドイツ普門寺創立10周年記念行事

Vol.34 (2007年4月25日)

巻頭「人・情報・縁—運動から行動へ—2期目にあたって」S Z I会長 福島伸悦／特集 2007年度総会講演録「ヨーロッパ国際布教の近況」ヨーロッパ国際布教総監 今村源宗

Vol.35 (2007年8月5日)

巻頭「感謝・合掌」米国仏教団浄土真宗開教総長 小杭好臣／特集1 両大本山ワークショップ講演録「如是願行」～私が歩んだ北米開教の道～／特集2 ヨーロッパ国際布教40周年記念行事報告／国際布教支援積立金現地報告「在家用応量器の寄贈御礼」ブラジレイピラス禪光寺国際布教師 ビッチ大樹

Vol.36 (2007年12月20日)

巻頭「坐」の布教 曹洞宗北アメリカ国際布教総監 秋葉玄吾／S Z I国際布教支援積立金運用報告受給者レポート～ 大雄山最乗寺雲衲 禪心

Vol.37 (2008年4月20日)

巻頭「包括主義」駒澤大学名誉教授 奈良康明／S Z I国際布教支援金運用報告 ～受給者レポート 安泰寺 ネルケ無方／S Z I創立15周年記念講演会「禪的発想のすすめ」講演録 (財喝破道場・報四恩精舎 野田大燈

Vol.38 (2008年8月30日)

巻頭「ととのえられし おのれ—佛主主義—」大本山永平寺監院 大田大穰／特集 S Z I創立15周年シンポジウム 基調講演「禅信仰と社会的実践」(抄録・前編) 駒澤大学名誉教授 奈良康明／パネルディスカッション「世界の曹洞禪—禪の果たす役割」

Vol.39 (2008年12月24日)

巻頭「世界にとっての禪」大本山總持寺監院 横山敏明／S Z I創立15周年シンポジウム基調講演 (抄録・後編)



2008 15周年記念シンポジウム



2008 15周年記念シンポジウム



2009 正力松太郎賞 (ゆめ観音実行委員会)



2009 フーデックス幕張メッセ



2010 總持寺WSルメー大岳師



2011 總持寺WSケネス田中師

Vol.40 (2009年5月20日)

巻頭「会長就任挨拶」SZI会長 細川正善／特集 2009年度総会報告 寄稿 映画『GATE』を観て 広島原爆被爆者 三宅信雄／第33回 正力松太郎賞 本賞 受賞

Vol.41 (2009年8月25日)

巻頭「仏の目、仏のモノサシ」愛知専門尼僧堂 堂長 青山俊董／特集1 両大本山ワークショップ講演録「宗教とは」～真理は一つ、切り口のの違いで争わぬ～ 愛知専門尼僧堂 堂長 青山俊董／特集2 SZI「塔婆供養で植林支援」モンゴル植林ツアー報告

Vol.42 (2009年12月20日)

巻頭「『遍界不曾藏』の禅を」永平寺副貫首 南澤道人／特集1 南アメリカ国際布教総監部・両大本山南米別院佛心寺創立50周年記念慶讃法会報告／特集2 サンフランシスコ75周年／好人庵15周年／サンフランシスコ桑港寺開創75周年慶讃法要

Vol.43 (2010年5月20日)

巻頭「曹洞宗国際センター所長就任にあたって」曹洞宗国際センター所長 藤田一照／2010年度総講演会抄録「法網今や西ひがし」ニューヨーク大菩薩禅堂師家 嶋野栄道

Vol.44 (2010年8月20日)

巻頭「我逢人の喜びを」大本山總持寺副貫首 江川辰三／両大本山ワークショップ講演録「海外の禅その現状とチャレンジ」北アメリカ国際布教総監 ルメー大岳

Vol.45 (2011年1月10日)

巻頭「日系寺院史編纂への思い」SZI相談役 福島伸悦／特集1 ブラジルローランジャ佛心寺50周年／特集2 サイパン南溟堂（国際礼拝堂）20周年

Vol.46 (2011年4月1日)

巻頭「東日本大震災 被災地の皆様に心よりお見舞い申し上げます」／

2011年度総講演会抄録 「国際布教伝道史への提言＜国際布教の古今東西＞ 小笠原隆元

Vol.47 (2011年8月18日)

巻頭「インターナショナルとは何か？」曹洞宗ヨーロッパ国際布教総監 フォルザーニ慈相／東日本大震災メッセージ／特集 両大本山WS講演抄録 「アメリカ仏教」武蔵野大学仏教文化研究所長 ケネス田中

Vol.48 (2011年12月20日)

巻頭「進一歩から進二歩へ」大本山總持寺顧問 小笠原隆元／2011ドイツ声明公演報告、国際礼拝堂 南溟堂動静報告

Vol.49 (2012年4月6日)

巻頭「Soto Mission of Hawaii 100周年を迎えるにあたり」ハワイ国際布教総監 駒形宗彦／2012年総講演会抄録「スティーブ・ジョブズと北アメリカの禅」前・北アメリカ国際布教総監 秋葉玄吾／「第8回 曹洞宗ハワイ・北アメリカ檀信徒大会参加報告」



2012 総講演会

特集 SZIのこれまでとこれから(2)

私が考える「SZIのこれまでとこれから」

SZIのこれまでとこれから

会 長 細 川 正 善 (福島県 天徳寺住職)



2009年京都で行われたOB会

宗門の国際布教の歴史の中で、ハワイ・ワイパフ太陽寺・カウワイ禅宗寺では来年2013年に110周年(1903年設立)、北米ロサンゼルス禅宗寺(1922年設立)では本年90周年を迎え、更には来年はSOTO禅インターナショナル(SZI)結成20周年の節目に当たります。

こうして国際布教の歴史的記念すべき年に20周年を迎えられますことは、これ偏に当会の活動を支え御尽力を賜りましたスタッフ並びに関係各位と会員各位の御法愛の賜と衷心より感謝を申し上げます。

SZIの活動は、海外寺院の支援交流のパイプ役と、人材育成を目指して数々の企画・支援を実施してまいりました。

その間、宗門の国際布教に対する指針は各布教地区の機構

の見直しと宗制の整備、各禅センターの僧籍簿の設置、宗典の英訳と目覚ましく、新たな国際布教の展開をなしております。

このことは、長年各地に於いてその礎を築いて来た先達諸尊宿の開教に対する熱意・道心とメンバー各位の尽力、更には新たな国際布教展開を提唱・啓蒙活動してきたスタッフ各位の賜であったかと自負しております。

今、世界は最も狭くなり、最も早い情報共有に、経済・産業・文化も一国の中だけでは成り立たない世の中になってきました。

私は、「人・情報・縁」をテーマに前福島会長より継承し、ここ数年活動して参りました。その情報産業を代表する時代の寵児として、アップルコンピューター CEOのステイブ・ジョブス氏はその経営哲学に表れている物へのこだわりと知野(乙川)弘文老師と「禅」との出会いにより、機械と人類の融合調和・心(精神世界)の重要性に目覚め、世界唯一の情報網を構築致しました。

しかし、情報世界の進歩は反面、多様化し歯止めの効かない氾濫する情報の中に、誤った解釈と発信も同時に共有している時代であるかと存じます。

こうした時代の流れにあって、私たちは正しい知識(智慧)認識を持ちながら、各地における布教拠点を情報の発信源とし、情報の共有と交流研鑽を重ね、人材の育成・支援活動を継続しながら、その点と点を結び一つの線として国内外の布教発展の一翼を担っていければと思っております。

今後とも尚一層の御支援、御法愛を賜りますようお願い申し上げます。

関わりゆく仏教

相談役 福 島 伸 悦 (埼玉県 興徳寺住職)

30数年前、国際布教師としてアメリカに渡り、アメリカに根付きつつあるダイナミックな生きた仏教に出会い、僧侶としての自覚を新たにしました。それは社会との関わりの中で具体的に動くということです。カリフォルニアという土地柄のせいかもしれませんが、抹香臭くなく明るい環境の中で、いきいきと坐禅、作務に励む僧侶や信徒の姿に感動したものです。

エンゲージド・ブディズム(行動する仏教)という言葉は耳慣れてきました。これを提唱し実践しているベトナム僧ティック・ナット・ハン師を招聘し、講演会やワークショップを平成7年に開催しました。僧侶の人たちよりも一般の人たち、特に若い人たちの関心の高さには驚かされました。



1995年5月 ティック・ナット・ハン清里リトリート

マスコミなどで葬式仏教と揶揄されていますが、社会の中で関わるという意味では、葬式も大事な布教の場でもあります。そこに僧侶としてしっかり関わる、そして、地域の中で寺の存在価値を高める具体的な活動をそれぞれが追及していく姿勢が社会に見せて行かなければならないと思います。SZIが進めている「塔婆供養で植林支援」は環境問題を考える具体的な活動です。私も含めスタッフは、具体的な活動に関わってきたことによって成長してきました。

この度、会報50号が発行されるわけですが、会発足から会報の編集者として関わってきたものにとって感慨深いものです。会報は海外の情報をお知らせするとともにサポートして下さる方達の唯一の媒体で、インターネットが発達した今でも大事なものです。これからも海外情報を共有し、国内の布教教化の参考にして頂きたいと切に願う次第です。

これからのSZIに望みたいこと

相談役 藤川 亨胤（山形県 般若寺住職）

私は年数回海外に出掛ける機会がございますが、外国の人々に比べこの国の人々が決定的に劣る点の一つあるのに気付かれます。

それはなにか。忍耐、耐えるという特性であります。

今から40数年前、アメリカの著名な心理学者コンラド・ローレンツは、その著書の中で文明が発展すればするほど大人が際限なく幼児化し、マスコミの影響などによって子どもたちが際限なく頭でっかちに大人化するといわれました。

彼はこの双方に共通するものとして忍耐の欠如を挙げられました。が、その忍耐の欠如には精神的な欠如と肉体的な欠如との二つがあることも併せて説かれました。

精神的な忍耐の欠如、それはそのまま自殺者が際限なく増え続けることにつながるであろうし、肉体的な忍耐の欠如は間違いなく風邪を引きやすい体質となって表れるであろう。自殺をする方が現在の5分の1しかいなかった40数年前、ローレンツはそう言って驚くなかれ今日のこの国の未来、現代の様相をずばり言い当てる様な予言をなされておられたのです。

自分の命を簡単に捨てるという風潮は他人の命をも簡単に奪うという近年のおぞまし過ぎる多くの事件に繋がっているように思えて仕方がありません。

しかしながら、文明の発展を否定したり阻止することが不可能な現代、否これまで以上にそれを享受するであろう今の時代に生きるこの国の人々の乾ききった心に潤いの水を注ぎ込むことが、砂漠化した土地に緑を植えることと同様にSZIがこれから果たすべき大きな責務であろうかと思っておりますし、私利私欲から離れた真のスピリチュアルリーダーの育成こそ、SZIに課せられた使命であろうと確信いたします。

あらためて会報50号出版おめでとうございます。

人材の育成と枠を超えた内容が鍵となる

山本 健善（長野県 桃源院住職）

平成5年2月8日に、50名ほどの宗門要路の方々が東京グランドホテルに集い、「宗門の国際化」を目指し本会が発足した。その後さまざまに間口を広げつつも、本義を失わずに維持発展してきた。内外からの信頼も得られ、活動の場は増えていくであろう。人材の育成は常に将来の発展の礎となる。今後は“インターナショナル”として、枠を超えたその内容が求められていると思う。

因みに、わたくしはその発足会に病欠してしまったせいか、どうも乗り遅れを感じております。

合掌

20周年に当たり心より御祝いを申し上げます

月出（善浪）俊典（静岡県 重林寺住職）

思えば20年前は、曹洞宗宗務庁では海外開教から国際化へと布教教化の流れが一步一步変化していった時でした。その中で“元開教師”各位を中心に“開教師協議会”の名の元“Soto Zen International”が発足した事を当時海外開教担当として記憶しております。曹洞宗にも新たな国際化への道が開かれたと感じうれしく思った事を思い出します。また、‘SZI’の発足より約2年後、講演会また、「Workshop」のため来日していたThich Nhat Hanh, Plum Village 一行、禅センターのRichard Baker関係者共々総会にて記念撮影を行った事を思い出します。（会報第4号の表紙に掲載されているように記憶しております） 私たちは関係者との対話を通じ、新たな前進と共に「SZI」へ課せられた大きな期待を感じておりました。その後、内外共に大きく活動を推進、曹洞禅の布教教化、社会活動への「Buddhism」としての躍進には目覚ましいものがあります。

この先の「10年」の「Soto Zen」国際化また「International」とは何かについて思い下記の4点を自問するのです……

① Who are we or what is SZI?

我我とは又はSZIとは？

② Where do we want to do?

(SZI)はどこへ行くのか？

③ How do we get there?

いかにしてそこへ到るのか？

④ How have we done?

その結果は？

今後更なる時代へと進む事を心より期待しております。

合掌

海外寺院は日本仏教のアンテナ・ショップ

副会長 飯 島 尚 之 (東京都 宗清寺住職)

いまの日本が諸外国から謙虚に学ぶべきことは、それらの国々の国際化社会・情報化社会・格差社会等々の「社会的帰結」への対処方法であります。

日本においても経済と技術の発展や円高に伴い外国人が増加し、急速な国際化と共に文化変容が起こりつつあるのが現実であります。こうした時代の流れの中、海外の布教地において遭遇する数々の問題点を忌憚なく直視し、示唆的で現実的な情報を日本へフィードバックすることは、日本における寺院の近未来を知る極めて重要な要素であります。つまり宗門にとっての海外寺院は「日本仏教のアンテナ・ショップ」といって過言ではないからであります。

SZIは、これからも国際布教の推進とともに海外からの新鮮な情報を提供することによって、教化活動の一翼を担いたく努力をしてまいります。

増々の必要性！

副会長 加 藤 孝 正 (静岡県 永明寺住職)

SZIが両大本山・宗務庁の後援を得て20年間続いてきたのは必要性があるからだ。今ではインターネットを駆使できる人材を事務局に揃え、時流に乗った曹洞宗の海外布教支援組織になっている。設立当初とは様変わりだ。海外駐在布教師にとっても心強い存在に違いない。現在ではハワイ・北米・南米・欧州と4ヵ所に布教総監部が構えられ、南米以外は現地人がトップとなり、現地の常識で対応できる態勢になっている。海外ではヒエラルキー型支配構造ではない。そもそも曹洞宗の海外展開は、歴史的に、組織の力に依るものではなく、布教師個人の力量に負うところが大きい。各布教師の個性がその地の歴史・風土・社会生活の中で醸成され、多様性ある宗風に育っているのだ。潜行密用型もある。未だ日本には知られていない、あるいは表に出て来ない坐禅会が、世界各地に多数存在し、しかもその数は増えている。それらの組織は日本と没交渉でも立派に成り立っているのだ。国際交流が身近になった今日、宗務庁国際課とは別箇の、組織に縛られないで柔軟に国際交流を志向できるSZIは、増々その存在意義が理解され必要とされるであろう。



ブラジレイピラス禅光寺制作の
自然環境保護教育のためのテキスト

SZIと教化活動

副会長 浅 井 宣 亮 (愛知県 地藏寺住職)

現代社会の国際化に乗り遅れないようにと、小学校から英語教育が始められています。これは素晴らしいことですが、「英語さえ話せれば、世界の人々とわかり合える」という考えには少し誤解があると思います。例えば、日本語が話せる日本人同士であれば、誰とでも打ち解け、会話が弾むのでしょうか。そんなことはありません。会話が弾むためには、「話す内容」を持っていることが必要です。相手が「知りたいと思う情報」を持っている人は、会話の話題に困らないと思います。寺院

の教化活動においても同様ではないでしょうか。「檀信徒の皆さんが知りたいと思う情報」を持つことは不可欠だと思います。

歴史的に振り返ると、寺院は情報発信の場所という側面も持っていました。中世に寺院で始まった寺子屋。また、禅宗が伝えた抹茶などの外国文化は日本文化に大きな影響を与えています。

S Z Iは曹洞宗海外開教師支援のために設立されましたが、同時に、S Z I会員の皆様に海外の情報を伝えることも目的としてきました。教化活動のお手伝いができるような「新しい情報」を提供できるよう、これからも一層努力していきたいと考えております。

課題を直視し、活動内容を修正する必要性も

副会長 田 宮 隆 児（新潟県 興源寺住職）

2003年10月、ハワイにおける曹洞宗開教100周年記念行事が盛大に行われました。当時ハワイで布教師を務めていた私はS Z Iの活動をよく理解していませんでしたが、何かと準備が行き届かず、不手際が多かった地元僧侶の立場として法要前日遅くまで会場の準備を手伝っていただいたS Z Iの会員の皆様には本当に助けられました。その後まもなく帰国し、縁ありS Z Iスタッフの仲間入りをさせていただき今に至っています。

現実的な話になりますが、これからのS Z Iは課題が沢山あります。スタッフはそれぞれ自坊の檀務の他、宗門の活動や地域の活動に関わっておりなかなか思うように時間が取れず、一部のスタッフにかなりの負担がかかっているようにも思えます。これからもS Z Iとしての活動を継続して行くには課題を直視し活動内容を修正して行く必要性もあると感じています。

最後に現実との矛盾があることを承知で「夢」を語らせてください。部分的であれ会報の英訳が可能ならS Z Iの活動をもっとアピールできるのではないのでしょうか。さらに両大本山WSも通訳付きでせめて英語に対応できればお招きする講師の層も厚くなるのではないかと思います。

時代に即応したフットワークの軽い活動を

事務局長 亀 野 哲 也（神奈川県 貞昌院副住職）

私がS Z Iに参加させていただききっかけとなったのは、1996年10月16・17日の日程で行われたワークショップ「文化変容の中で生きるお寺～伝える手段としてのマルチメディアの可能性と危険」にパネリストとして招かれ参加したことでした。

この時、招聘されたパネリストは、全曹青パソコン通信研究部に所属している大森篤史師、寺院の情報をホームページを開設している西山直彦師と私、そしてインターネットユーザー側代表として岡野定丸師。それぞれの立場から普及し始めた新しい情報発信手段についての発表を行いました。

今では当たり前の手段となっているインターネットですが、当時はまだまだ使っている事例は少数でありました。スタッフ一丸となって、広く世界から情報を集め、そして情報を積極的に発信するためにどのようにしたら良いのか、真剣に学んでいた時代でした。当時は、今のように携帯電話や、インターネットがこれほどまで急速に日常生活に入り込んでくるとは誰も予測しなかったことでしょう。しかし、そこにS Z Iの先見の明があったのではないかと感じます。

このワークショップを契機に、S Z I活動に関わらせていただきましたが、発足当時より、実に和気藹々とした自由な雰囲気漂う会であるという印象を受けました。

発足初期の熱い思いを忘れることなく、これからも時代に即応したフットワークの軽いS Z Iらしい活動を展開できるよう、取り組んで行きたいと考えています。

今後の展開に期待です。



1996年10月のワークショップにて発表中の亀野事務局長

1997年海外徒弟研修会の思い出

監 事 黒 柳 博 仁（長野県 本地院住職）

S Z Iの20年の歩みの中で特に記憶に残る事業の一つが、1997年の海外徒弟研修会である（詳細は会報12号）。学業期にあった6名の参加者はその後、東大（3名）、慶大（1名）、医学部（2名）へと進んだ。禅・仏教の普遍性を単に言葉としてではなく、如実に体験し、自分が置かれている環境の価値、将来の可能性の広がりを感じてくれたのではないかと思います。海外布教に尽くされた諸先輩方のご労苦と夢の跡から現代の宗門子弟が果実を得てくれた事がうれしい。

外国人スタッフを起用し英語化なども

監 事 葉 貫 成 吾（福島県 石雲寺住職）

これまでの永平寺、總持寺ワークショップ、ゆめ観音アジアフェスティバル、SZI会報配布、SZIホームページの運営などたくさんの事業をこなしておりますことは、SZI現会長をはじめ歴代の会長、そして執行部の方々には、頭がさがる思いです。やはり継続は力なりで、事業を続けて行くことが大事であると思います。

そして、これからのSZIにつきましては、最近、多くの企業も会議を英語で行うように成ってきているので、SZIも外国人のスタッフを入れて、少しずつ英語化に取り組むことも必要かと思います。私はマウイで何回か英語の会議に出ましたが、会議についていけない苦い経験があります。個人的には、かなりハードルが上がってしましますが、進歩のために皆様も努力して戴ければと思います。

世界中の禅を多くの人に

会 計 太 田 賢 孝（東京都 大龍寺副住職）



スタンフォード大学でおこなわれた道元禅師生誕800年

平成10年、カルフォルニア・スタンフォード大学で行われた道元禅師生誕800年記念のシンポジウムが、SZIとのご縁の始まりでした。サンフランシスコの寺院・禅センターに祀られているご本尊さま！ 英語で語られる仏教！ アメリカ人の禅僧！ 何もかもが既成概念に当てはまらないものでしたが、逆に、仏教とは何か、禅とは何かと、考えさせられる旅でした。今後、多くの人が世界中の禅世界に触れられるSZIであればと思います。

最も印象的なプロジェクト

会計補 内 山 温 子（静岡県 随縁寺寺族）

事務局員として参加させていただいて以来、まだ5年ほどの私にとって、『海外寺院ガイドブック』制作プロジェクトが印象的です。このような作業に携わっていると、互いに地域を異にしながらも一移民として暮らしてきた師たちの血脈の強靱さを感じます。wikipediaでは日々アップデートがあります。『海外日系寺院史』の編纂と同様、100年後…またその先も重要資料として残せるものになるよう尽力いたします。



海外寺院ガイドブック

海外布教活動にふれて

出版編集長 廣 澤 道 秀（神奈川県 成願寺住職）

海外寺院の活動を何も知らずに役員としてお手伝いをさせていただいて6年程になります。

ZENというものが現在のように認知されていなかった時代での開教師の方々の苦勞話を聞くたびに、今の日本に於いて何か活かすことができないかと考えられます。

国際教化への一助ができるような情報を発信していきたいと思います。

情報提供のお願い

編集長補佐 佐 藤 慧 真（新潟県 興源寺徒弟）

4年前の8月に、初めて役員会に顔を出して以来お世話になっております。その時はロングヘアーでしたが、SZIの皆様の不思議な明るさ、おおらかさに憧れて、宗侶の仲間入りをさせていただくに至りました。

主に編集関係として今考えていることは、より一層緻密な情報集約の必要性についてです。会員の皆様のネットワークを駆使していただいて、事務局へのさらなる情報提供をいただけますよう切に願う次第です。



今年2月、コナ大福寺の火葬場に案内していただき（現在は使用されていない）国際布教の重みをずしんと感じた

活動の思い出は… 事務局員 菅原 研州（宮城県 城国寺副住職）

私がSZIと関わるようになったのは、道元禅師750回大遠忌を前にアメリカ・スタンフォード大学で行われたシンポジウムに参加するスタディーツアーに加わってからです。それから、色々なことを経験させてもらいまして、本当に感謝が絶えないのですが、やはり思い出として語るならば、塔婆植林企画の一環でモンゴルに行ったことは外せません。

2009年の6月16～20日までの4泊5日で行われたツアーは、既に会報41号でも報告させていただきましたが、モンゴル帝国の末裔が住む国、モンゴル仏教の様子、植林に懸ける方々の強い想い、それらを見聞してきました。得ることの多い旅路で、植林への想いを聞き、モンゴルで臨済禅師に会った印象でした。喝は食らいませんでした・・・

なお、私自身は現地での暴飲暴食が祟り、帰国後急性胃腸炎になり、近所の医者へ喝を食らいました。



2009年モンゴル植林ツアー

イベント、OB会担当として

事務局員 細川 浩代（京都府 宗仙寺寺族）

事務局でイベントとOB会の担当をしています。中でも3年前に地元京都で行った、OB会を兼ねた忘年会が一番印象に残っています。京都らしい風情の場所で美味しい京料理を！という要望があり、祇園花見小路にある料理屋のおかみさんに頼んで席を設けてもらいました。従来ない程の大盛況で、参加者には永平寺東京別院監院（当時）武田老師や、サイパン南溟堂の秋田夫妻もお越しになり、楽しいひとときを過ごしました。是非また京都で開催したいと思っています。

来年SZIは20周年を迎えます。この会をもっと多くの方々に知っていただき、皆さんが気軽に参加出来るよう色々と考えたいと思います。

海外から日本の曹洞宗寺院の今後を学ぶ

事務局員 館 盛寛行（神奈川県 梅宗寺副住職）



2003年 ハワイ開教100年。スタッフらも10年分若いです

曹洞宗では1999年にアメリカ・スタンフォード大学を会場として、道元禅師御生誕800年記念シンポジウムが開催され、また、2003年にはハワイ開教100周年の記念法要が行われました。SZIの事務局員として行事のお手伝いをさせていただきましたが、とても貴重な経験でした。現在ではインターネットの普及により、世界各地の方々と情報交換ができ、様々なことを知ることができます。しかし、実際にその国へ行き、その国の土地や空気を肌で感じ、現地の方々と語り合うことで、はじめて分かることも多くあります。また、海外から日本を改めて考え、そして自分自身を振り返るという視点も重要だと感じました。

曹洞宗には、アメリカ、ハワイ、南アメリカ、ヨーロッパを中心に数多くの寺院があり、国際布教師の方々が活躍をされています。それらの方々が、どのような環境で、またどのような思いで活動をされているかを、実際に現地で見聞きすることで、日本の曹洞宗寺院の今後のあり方が見えてくることと思います。

世界に敷衍する曹洞禅

事務局員 大谷 有為（東京都 長泰寺副住職）

私にとってのSZIは、私自身の国際布教に関する様々な活動の原点であります。そして、その私自身もSZIに育てていただいたといっても過言ではありません。これまでのSZI会員の皆様からのご支援、並びに海外開教師・国際布教師の諸先輩・諸老師方のご指導に深く感謝申し上げます。

私達の責務は、日本から歴史的文化背景の異なる海外諸国に、確実に敷衍している曹洞禅を現地において確固たるものにし、さらにその伝播を一步も二歩も推し進めていくことであります。

今後とも、SZIならではの機動力を生かし、微力ながらも曹洞宗の国際布教のお手伝いができればと考えております。

ハワイ開教100周年慶讃法要の思い出

事務局員 吉田 宏 得（静岡県 萬松院住職）

会報50号発行、誠にありがとうございます。そして、多大なる同事の浄行を持つての布施行に感謝致します。

S Z Iの機動力と結束力の陰の力の賜によって『ハワイ開教100周年慶讃法要』は支えられ成功に漕ぎ着けたと感謝の思いをもって回顧できます。…と言うのも、「開教の先哲諸師と先亡の檀信徒に報恩の誠を捧げ、今後のハワイでの宗風興隆を誓う。」を趣意とし、ハワイの信徒を中心に日本の宗侶と檀信徒をお迎えして、盛大且つ歴史に残る行事と成り、より強固な架け橋を築ければと願い動き始めました。当時ハワイ総監部役員の責にあった私は、この100周年記念大行事を修行するに当たり、企画実行委員長のお役を任されておりました。しかし現況は、高齢域に入ったベテラン開教師と就任間もない若手の開教師が大多数である上に、ハワイの地理的難条件も加えて開教師相互の連絡や意志の統一も思うようにならず地元も纏まらない処で、更に日本からの大事なお客様達をお迎えして挙げるには、十分な準備が整わず不安と焦りに押しつぶされそうの中で時が過ぎて行きました。

そのような中で、S Z Iの協力を戴き日本側にも事務局を置いて戴く事で、地元ハワイに専念でき、必要に応じてS Z Iと連絡を取れば良く、これらの不安や焦りが一挙に払拭しました。それ以後は、当日へ向けて日捲りを一枚一枚撒くって行くことが、充実の積み重ねと感じられるようになりました。

行事の数日前からハワイ入りして下さった事務局の方の協力で、最後の詰めも難なく結ばれ、前日の夜もハワイ開教師の手数の足りない所を夜遅くまでカバーして下さり、更に当日はお客様方の受付そして案内と裏方に徹して、ハワイ側のスタッフでは手の届かない細かな個所への配慮頂くお陰さまを以って、和やかで爽やかなハワイの風を表舞台には吹かせる事が叶い、成功裏に円成できました。S Z Iの和合と三心を持った素晴らしい機動力と道心のお陰を戴く事で、私の課せられた大役の任を全うする事ができました。

ハワイでの一面を見ても、S Z Iの陰の力を偉大に感じています。他の海外地域の曹洞宗に於いても、国内に於いても多大なる業績が積み、着実に貢献して下さっていると思います。益々の発展と充実を願います。

会報50号を記念して

事務局員 黒田 博 志（神奈川県 善光寺住職）

善光寺と海外布教のつながりは古く、先代住職の実兄、前角博雄老師が北米開教師として渡米された昭和31年まで遡る因縁となります。当時、師父である先代住職は単身異郷の地に渡り正伝の仏法を広めようとする兄の姿に感動し、その志を敬し追慕する。また、自身の修行、善光寺の開創まで多大な影響を頂いたと後に窺い知ることができました。師父はインドの佛蹟を尋ね、タイ国ワットパクナムでの修行、前角老師と共にロサンゼルス禅センターで修行の後に横浜に善光寺を開創致しました。その理念は『宗祖を通して釈尊に還る』です。前角老師が言葉の違う社会でどのように正しい仏法を伝えて来られたのか。師父はそれこそ体当たりで指導されていたと教えてくれました。仏教は学問ではない、如何に自分自身の問題として体现できるか。善光寺開創後、すべての源は人づくりと発願して寺檀一体となって発足した留学僧育英会もはや25回を数え、育英生125名となりました。私も第16回育英生としてタイでの安居を経験し、またアメリカやドイツで脈々と仏法を伝えて来られている諸老師方と寝食を共にする中で前角老師が体现されてきた事の何万分の一かに触れる思いが致しました。S Z Iに入会し、諸々の活動を目の当たりにしますと、その豊富な人材、ご縁に感服致します。私自身、師父遷化後、益々国際化する曹洞禅に前角老師の志を想い、師父の跡を追いつつながら、微力ながら皆さまのお役にたてるように精進して参りたいと思います。

S Z Iの活動を通して世界中に曹洞禅が広まり、人々の安心、平和、幸福に寄与されますことを心よりご祈念申し上げます。

国際布教を通して脚下を見る

事務局員 亀野 元 彰（神奈川県 静翁寺徒弟）

事務局員とは名ばかりの新参者が申し上げられる立場ではございませんが、会報発行等でお手伝いをさせて頂く中で、海を越えた諸老師方が植えられた仏種が、多くの方々の努力を糧に次々と花を咲かせている事に改めて気づかされます。海外で根付いたパワーのある曹洞禅には学ぶべき事が多く、今後の日本仏教にとって一つのベンチマークとなっていくと感じております。S Z Iは、これからも国際布教を通して脚下を見る大きな役割を担うものと確信しております。

特集 SZIのこれまでとこれから(3)

両大本山修行僧が考える国際布教

～両大本山ワークショップ 感想文から～



永平寺参道前。緑の美しい季節でした

6月1日(金) 大本山總持寺三松閣大講堂において、また6月7日(木) 大本山永平寺吉祥閣大講堂において、SOTO禅インターナショナルのワークショップが行われました。講師に元北アメリカ総監部総監・好人庵住職 秋葉玄吾師を迎え、今年2月の総会講演会の「スティーブ・ジョブズと北アメリカの禅」についてお話いただきました。演題を離れた修行僧への篤いエールともいえる様々なお話もありましたが、講演を聴講して書かれたアンケートから、現在の修行僧らが国際布教についてどのように考えているのかに焦点を当て、一部紹介してみたいと思います(内容は編集により抜粋)。

6月1日(金) 大本山總持寺修行僧の感想

- アメリカをはじめ、海外で“禅”というものが注目されてきたことは、話には聞いていたが、本日、聞いていた以上に広まっているのだと思いました。海外での禅に対する勉強は熱心である為、それに負けずに学ばなければならないと思いました。
- 戦前に築かれた北アメリカでの禅布教での礎が、大戦を経て、60年代のヒッピームーブメントと共鳴して、一気に広まりを見せて現在に至るまでの歴史を、生き生きと聞かせて頂きました。また、スティーブ・ジョブズの複雑な個性に、禅が多大な影響を与えていた事に、感銘を受けました。欧米の人々が曹洞禅に惹かれる理由を、私も私なりに考えてみようと思います。
- 父が以前宗務庁の教化部長をさせていただいていた際にSZIの話はよく聞いておりました。私自身15歳の頃から英国の方で大学に至るまで生活しておりまして、海外の仏教(特に坐禅)の流布については目の当たりにしてきました。本山を出したら、海外布教の現場、またそれにまつわる国内の動

静等学んでみたいという気持ちでおります。ロンドンを中心として、ヨーロッパの主に芸術集団の禅に対する興味というのは虚空ではないなと留学中に度々感じました。今後に大きな期待を感じます。(東京都 24年上山)

- なぜ禅(坐禅)が外国の人に人気があるのか?なぜ日本ではなく仏教を海外に広めようと思ったのか?自分も一度は、海外の禅を体験してみたいと思った。
- 私たちは、東洋に生き、日本文化の中で仏教をとらえ、禅を説こうとしています。漢字の禅語や、檀家制度により成り立ってきた寺院を離れ、真の釈尊の教え、禅の純粹な教えについて北米の開教の歴史に学ぶべきことが多いと感じました。原点を見直す場として、欧米に学ぶことの大切さを知りました。実際に現地にて参究することが楽しみです。
- 私は本山に安居する以前から、海外僧堂というものに興味を持っていましたが、本山に来てから1年過ぎた今、それがより強くなっているように感じます。今年も本山で海外研修がありますが、それに応募しようと思っています。
- 北米における宗門活動、布教の現状が窺えた。北米以外での他国の宗門活動も知りたいと思いました。
- もうすこし、歴史だけでなく、今の内容や、課題なども知れたかった。精神的な話しはおもしろかったが、そこだけでなく色々な人種、人々の考え方なども聞きたい。

6月7日(木) 大本山永平寺修行僧の感想

- 非常に感銘を受けました。禅センターという存在は知っていましたが今回の講演会でより知る事ができました。一番印象があったのは、アメリカにおける仏教徒の割合が2%から5%に上がったという事です。縁があれば、世界各地の禅センターに足を運んでみたいと思いました。(神奈川県 23年上山)
- 海外の僧が瑞世した後どのような活動をしているのかという事も気になりましたので、機会があればまたお話を聞きたいと思いました。(山口県 23年上山)
- 海外布教に興味があるため、もっと様々な事を聞きたいと思った。先日送行された如是さんの話にもあった様に、海外の「禅」に対する熱が高い事に驚き、又布教師の数が少ないため、現在布教活動をしている布教師が引退した場合、かなりの数の布教師がいなくなる事に悲しみを感じる。日本みたいな檀家制度ではないから、寺の維持自体、難しいかもしれないが、機会があれば海外布教師を間近でみて、どの様な感じなのか知りたいと思った。(長野県 24年上山)
- 仏教がこんなにも欧米諸国に広がっていると知らなかった。自分の知人にアメリカで布教活動をされていた方がおられるが、すごく楽しそうだったのが印象的だった。海外というのが私自身興味があるので、一つのきっかけになったと思う。これを機に更に海外と仏教について知識を深めたいと感じた。(滋賀県 24年上山)



- 北アメリカで多く活躍している日本人の僧侶がいる実態を知り、私も行きたいと思いました。ただ英語で禅を伝えていくことに少し難しさを感じた。(兵庫県 23年上山)
- 講演を聞いて、アメリカでこんなにも禅の教えが広がっていたんだと思いました。もしかしたら、本当に何十年後には、日本がアメリカなどの海外の国から禅を教えられる日が来るのではないかと思います。
- 曹洞宗の禅思想がアメリカ人に受け入れられていることが喜ばしい。そう思うのは、私が海外布教に興味があるからです。私の祖父はブラジルで開教師をしていました。ブラジルの場合ですと、日系4、5世の人たちになると日本語を話すことが出来ない人たちが多くいます。ですので、親などが信仰していたものを次の世代の方々がどのように受け取るかによって曹洞宗の展望が大きく変わってしまうのは間違いないと思われます。その為にも様々な人々に親しまれるような曹洞宗の布教活動が求められてくるでしょう。具体的には坐禅の普及や読経させるといった禅宗としての特色を伝えてあげることが必要になってくるのではないのでしょうか。(宮城県 24年上山)
- 私は元々海外に興味があり、今回の講演は参考になりました。海外での生活、文化、人種の違いを実際に体感したいです。(北海道 24年上山)
- 先日まで米国の僧侶が本山に安居されており、米国に禅が入ってきて最も盛り上がった年代の人々がもう高齢でこの先の禅の展開、展望を危惧されておりました。そういったお話も聞ければと思いました。(福岡県 21年上山)
- 海外での禅センター等の布教活動に興味があるので、禅センターは、基本的に現地の人で運営されているという事は勉強になった。次回は、禅センターで働くにはどのような経緯を経なければよいかという事を詳しく聞きたいと思った。
- 檀家離れが多くなっている日本の若い方に、世界では禅がこれだけ知られており、外国の若い方にも幅広く知られているというのを伝えていき、興味を持って欲しいと思いました。(熊本県 24年上山)
- 今回初めて曹洞宗の海外への布教活動についての話を聞いて、外国の人達の禅に対する興味や熱意に驚かされました。日本人が将来外国の方に坐禅を教わる日は近いと思いました。(茨城県 24年上山)
- 日本人の宗教に関する無知・無関心さを改めて痛感しました。また、私達は大変恵まれた環境で修行させていただいていることを感じました。増加する海外僧の方の瑞世拝登なども現在の宗門の傾向だと思いました。場所や時間に限られず、正しい仏法を学び伝えることが今の私達に求められていることだと思いました。(愛知県 21年上山)
- 禅というものが道元禅師の説かれた内容とは異なった、ある種カジュアルなスピリチュアルブームの一環として若年層に受け入れられていっている中、こうした正式な形で布教活動がなされ、又海外という場において強く支持されていると知り、驚きました。現代において布教活動というものがいかに難しいかは周知の通りですが、そんな困難に真っ向からぶつかり、地道な活動を続けられているS Z Iの方々にも少しお話を聞かせていただけたらよかったです。(島根県 24年上山)
- 最近北米総監が秋葉老師からアメリカ人のルメー大岳老師に変わったとお聞きしましたが、これは日本の「曹洞禅」がアメリカの人々に受け入れられ「SOTO ZEN」としてアメリカ人のものとしてこれから発展していくと考えてもよろしいのでしょうか。外国の人の中には日本人以上に禅に熱心な人が多いように感じられますし、鈴木俊隆老師、乙川老師、秋葉老師らのような偉大な先輩方が数十年に渡って海外で布教を続けられた結果、もう曹洞禅は日本人の手を離れ、彼らのものとなったのでしょうか。禅仏教は十分世界宗教になる可能性があると思いますが、その上で、我々曹洞宗の日本人僧侶はどのように行動すればよいのでしょうか。(宮崎県 24年上山)
- 私は海外布教に大変興味があります。世界がこれだけ広く沢山の宗教がある中で、禅に興味を持ち信仰し、取り組んでいる人が海外に沢山いるということはすごい事であり、ともなう海外で布教活動をしている方々がとても真剣で、熱心に禅の教えを広めているのだと思いました。海外布教師になるためには何か資格がいるのか。特別外国語が得意でなくてはならないのか。どのような方々が海外布教師になれるのか。とても気になります。私達が信仰する禅が、世界規模で認められ、多くの人達の生きていく中で大切な何かを見つける鍵となればとてもやりがいがあることだとも思いました。(静岡県 24年上山)

SZI express

会費納入者・賛助金納入者名簿 2012年3月21日～2012年7月20日まで

ありがとうございます。
大切にに使わせていただきます。

■ 会費納入者ご芳名

(順不同・敬称略)

茨城県 龍泉院
宮城県 輪王寺
千葉県 観音寺
神奈川県 中野東禅
福島県 長泉寺 石月聰明
青森県 大乘寺
福島県 村上徳栄
山形県 宝泉寺 采川道昭
東京都 龍澤寺 関岡俊二
静岡県 栄林寺 桜井孝順
埼玉県 龍泉寺
福島県 洞雲寺
群馬県 建明寺 堪山泰学
宮城県 皆伝寺 天野英雄
福島県 天徳寺
京都府 山本現雄
神奈川県 龍寶寺
愛知県 宝泉寺
宮城県 柳徳寺 莊司大功
京都府 苗秀寺 大谷俊定
神奈川県 善谷寺
東京都 松月院
群馬県 長年寺
山形県 宮崎弘行
群馬県 龍源寺 渡辺龍道
愛知県 神蔵寺 柴田隆全
東京都 天桂寺
秋田県 松庵寺
青森県 宝積院 太田宏見
鳥取県 瑞仙寺 長曾龍生
東京都 善養院 諏訪尚道
岐阜県 正宗寺 原田道一
神奈川県 松野宗純
広島県 聖光寺 田中哲彦
埼玉県 建福寺
愛知県 長松院
神奈川県 大船観音寺 鈴木友子
神奈川県 大船観音寺
愛知県 永澤寺 岡島博司
青森県 大安寺内 長岡俊成
長野県 桃源院 山本健善
福島県 金平祖隆
群馬県 東善寺
静岡県 冷泉寺
東京都 福壽院 野口弘龍
静岡県 元長寺
群馬県 柴山輝行
東京都 玉宗寺
秋田県 補陀寺 大山陽堂

宮城県 曹洞宗宮城県宗務所
静岡県 随縁寺 内山秀三
静岡県 一乗寺 丹羽義裕
神奈川県 常泉院 松樹俊弘
長野県 円福友の会 藤本光世
東京都 高岩寺
神奈川県 東泉寺
福島県 福島BS観光
東京都 山下律子
霊岩寺 川橋範子
先照寺 磯田隆一
秋田県 月宗寺
千葉県 満蔵寺 森田英仁
神奈川県 栄林寺
愛知県 愛知学院
静岡県 信香院 高田路久
秋田県 満福寺
愛知県 天徳寺
北海道 法徳寺 伊藤禪龍
静岡県 高林寺
東京都 大泉寺
神奈川県 黙仙寺
愛知県 宝珠寺
宮城県 耕龍寺 清水了祐
東京都 南石夢工房
東京都 法清寺 奈良康明
静岡県 瑞光寺
大阪府 妙壽寺
長野県 正麟寺
埼玉県 長興寺 引間隆一
福島県 蔵円寺
埼玉県 植野晃
北海道 定光寺 大道光肇
埼玉県 円通寺
秋田県 東泉寺内 佐藤一應
愛知県 青眼寺 神野哲州
長崎県 青眼寺
長野県 広沢寺 小笠原隆元
北海道 明光寺
東京都 喜運寺
神奈川県 倫勝寺
茨城県 鏡徳寺 山田栄一
東京都 観泉寺
静岡県 盤脚院
東京都 相馬正之
神奈川県 正翁寺 篁 素明
広島県 神昌寺 横山泰賢
埼玉県 東昌寺 長谷川昌光
静岡県 法幢寺 秋田弘隆
三重県 東正寺 片野晴友
千葉県 真光寺
宮城県 東北福祉大学
神奈川県 善光寺 黒田博志
愛知県 大光院

宮城県 寿昌院
静岡県 秀源寺
東京都 俊朝寺
長野県 智性院
岩手県 東海寺
埼玉県 興禅寺
神奈川県 傳心寺
東京都 清蔵寺
秋田県 妙妙寺
東京都 祥雲寺
宮城県 洞安寺
愛知県 慈光院 戸田規子
東京都 保善寺
埼玉県 東榮寺
愛知県 春江院 宮田春光
愛知県 慈光院 戸田規子
神奈川県 梅宗寺 館盛寛行
東京都 駒沢大学高等学校
神奈川県 東照寺 程木昭徳
東京都 蓮生寺
埼玉県 佐藤亮子
福島県 昌建寺 秋 央文
群馬県 南オモロ 出口淳一
静岡県 大慈悲院 野原全州
東京都 東長寺
千葉県 宗鳳寺 兄王重夫
新潟県 正統寺 鈴木秀一
秋田県 歓喜寺
神奈川県 長楽寺別院 市河雄峰
神奈川県 東漸寺
富山県 全龍寺 館 定道
東京都 宗参寺
秋田県 寿松木宏毅
東京都 萬福寺
神奈川県 西福寺
神奈川県 貞昌院内 亀野哲也
宮城県 洞林寺 吉田俊英
北海道 長尾龍心
東京都 佐藤昭次郎
神奈川県 興禅寺 市川智彬
長野県 興龍寺
福島県 安穩寺 黒金義範
神奈川県 泉秋寺 烏澤俊寛
静岡県 可睡斎
静岡県 洞雲寺 糸柳格順
福島県 円通寺 吉岡棟憲
静岡県 大泉寺
埼玉県 東竹禅院 岸 世一
新潟県 清蔵寺 来馬宗憲
東京都 清蔵寺 飯島尚之
山形県 清林寺 渡邊祥悦
埼玉県 慈眼寺 西村宗洋
山形県 持地院

群馬県 桂昌寺
神奈川県 淨心寺
埼玉県 大龍寺
神奈川県 大蔵寺
山形県 宗伝寺
福島県 常円寺
静岡県 林叟院
長野県 広沢寺
宮城県 功岳寺
群馬県 林昌院
新潟県 興源寺
桂昌寺
淨心寺
大龍寺
大蔵寺
宗伝寺
常円寺
林叟院
広沢寺
功岳寺
林昌院
興源寺

埼玉県 慈眼寺
山形県 持地院
静岡県 林叟院
宮城県 功岳寺
西村宗洋
関 弘爾

■ 塔婆供養で植林支援協賛者ご芳名

(順不同・敬称略)

愛媛県 漢寿寺
埼玉県 圓福寺
福島県 長泉寺 石月聰明
東京都 龍澤寺 関岡俊二
静岡県 栄林寺 桜井孝順
神奈川県 龍寶寺
東京都 青木尚子
宮城県 柳徳寺 莊司大功
東京都 松月院
愛知県 永澤寺 岡島博司
群馬県 東善寺
静岡県 元長寺
秋田県 補陀寺 大山陽堂
東京都 高岩寺
愛知県 天徳寺
静岡県 海蔵寺
埼玉県 長興寺 引間隆一
福島県 蔵円寺
埼玉県 植野晃
長崎県 青眼寺
長野県 広沢寺 小笠原隆元
茨城県 鏡徳寺 山田栄一
山形県 持地院 篁 素明
岩手県 東海寺
東京都 清蔵寺 来馬宗憲
宮城県 洞安寺 大山浄心
愛知県 慈光院 戸田規子
富山県 全龍寺 館 定道
神奈川県 貞昌院内 亀野哲也
東京都 水口優美子
神奈川県 泉秋寺 烏澤俊寛
神奈川県 大蔵寺
埼玉県 東竹禅院 岸 世一
山形県 持地院
神奈川県 大蔵寺 佐藤直道

植林累計 35件 苗木 12,556本分

■ 東日本大震災義援金寄付者ご芳名

埼玉県 大龍寺 伊藤智子

動 静 報 告

2012年4月1日～2012年8月20日

- 4月6日 会報49号発送作業 (貞昌院)
5月16日 プラム・ヴィレッジ仮設住宅被災者訪問案内 (福島県会津若松市)
5月18日 役員会、編集会議 (檀信徒会館)
5月31日 資料デザイン打ち合わせ (花デザイン)
6月1日 編集会議・大本山總持寺WS (大本山總持寺)
6月7日 大本山永平寺WS (大本山永平寺)

なお、随時インターネットで役員会を開催いたしております。

SZIホームページ運営中

会報バックナンバー、過去の総会・講演会、
スタッフページなどもご覧いただけます。



SZIで検索!!

SZI

検索

URL <http://soto-zen.net>

… 海外レポート …

オランダ「ZEN RIVER 禅川寺」僧堂開単法要

いそ だ こう いち
磯 田 浩 一（静岡県慶昌院住職）

5月5日、オランダ、フローニンゲン（Groningen）州、アウトハイゼンに佇む曹洞宗認可海外寺院ZEN RIVER・禅川寺（堂長アントン天慶コペンス老師）に於いて、中国天童寺 誠信（Cheng Xin）方丈老師、七堂塔寺 可祥（Ke Xiang）方丈老師をお招きして僧堂開単法要が行われました。また、法堂改修完了に伴う報恩供養法要も東京桐ヶ谷寺 黒田純夫老師をお招きして行われました。

僧堂の建物自体は昨年7月に建てられたのですが、室内は未完成。それから約1年をかけて塗装や装飾、単作りに至るまで、色々な職種のサンガメンバーの奉仕作業による「手作り」の僧堂が完成しました。堂内の様々な寸法は、ゼンリバーのメンバーがその所有する蔵書や記録の写真から割り出し、また実際に私が日本の僧堂から採寸した資料を提供して相談をしながら決めました。特に単の高さは「坐禅をした時の頭の位置が心身に影響する」というこだわりから、沢山の日本の僧堂の資料が大いに役立ち素晴らしい物が出来上がりました。

40人座れる内単は総て畳が敷かれております。禅堂建立と同時に行われた本堂の改修でも、法堂一面に畳が敷かれました。この畳はい草を使った本格的なもので、お隣りドイツから輸入されたものですが中国製という事からか、日本の物より若干「畳床」が柔らかめであり、ソフトな坐り心地でした。

昨年11月、天童寺宏智禪師誕辰920年記念禅学文化交流会の際に、黒田純夫老師のご縁で天童寺を訪れた事を起縁に今回の「天童寺、七堂寺」両御住職の僧堂開単法要の導師をお勤め頂く好縁が叶った訳ですが、両方丈様の初めての渡欧には、黒田老師の多大なサポートがなされてやっと実現の運びとなりました。禅堂内に安置された木製の「聖僧文殊菩薩像」も黒田老師の寄贈によるものです。

法要当日は、前日までの悪天候が嘘のようで見事な晴天に恵まれました。ヨーロッパのいたる所から信者、関係者、「故前角博雄老師」ご縁の諸師方が集まり、特に曹洞宗ではパリから、ヨーロッパ国際布教総監部のForzani慈相総監と松田英寿師に御随喜を頂きました。

法堂で黒田純夫老師御導師による法堂改修の因みの報恩供養法要が行われ、引き続き全員で屋外へ移動、僧堂開眼法要が執り行われました。法要導師は天童寺・誠信方丈老師がお



僧堂入り口

勤めになりました。

開眼法要である「開光式」では、洒水、香語の他、開眼の儀式として鏡が使われました。式中に侍者和尚から手渡された手鏡を、誠信老師がスッと正面にかざしたとたん、反射した強い太陽の光りが、僧堂内に鎮座なさっている聖僧文殊菩薩像の顔をまっすぐ照らしました。反射の角度を探ったわけでもなく、一瞬にして暗い僧堂内に発した一点の輝く円光は、僧形文殊菩薩の仏の光を開く文字通り「開光明」の瞬間でした。

そのまゝ一同は堂内に移り、七堂寺・可祥方丈老師による文殊菩薩像の開眼式が行われました。

両氏によるそれぞれの七言絶句の香語は、中国語だからこそ意味をもつ力強い押韻、また中国語の大悲心陀羅尼他の読経のハーモニーなどは、先の偶然成し得た不思議な「開光明」と併せてとても感動的な法要となりました。

道元禪師の教えと共に中国の禅の教えは日本に広がり、日本からこのオランダの北端にまで伝わった訳ですが、今回のご縁で再び中国まで回帰し繋がった事を示した歴史的な法要になりました。

天慶老師によると"Open Monastery（開かれた修行道場）"が、ゼンリバーの基本の姿だそうです。安居をしている雲衲が一般信者と同じ場所で仏道修行をする、それがヨーロッパで望まれている禅堂であり、これからの姿だと仰います。七堂伽藍に至らなくとも、必要十分な伽藍が整ったゼンリバーの流れを今後も見守っていく所存です。



開光式



禅堂内

… 国内レポート …

プラムヴィレッジ シスターらの被災地訪問 深く聴く

プラムヴィレッジ シスターチャイ



5月のプラムヴィレッジ僧侶たちの来日の際、会津若松の仮設住宅訪問企画者の方から、チャンティング（読経）や法話のご依頼を頂きました。それらは僧侶として大切なお勤めです。しかし現地到着後、我々は気づきました。今、ここで必要とされていることは、人々を元気づけるための法話でもなく、お経を唱えることでもない。まず、彼ら一人一人のストーリーに深く耳を傾けること。心の底から涙と一緒につらい思いを全部吐き出せるスペースをつくる。それが心の深い傷を癒すための第一歩です。

そのためにはまず自分自身の苦しみに耳を傾けることが必要です。人間一人一人が多かれ少なかれ苦しみを抱えて生きています。プライドを捨てて、自分の苦しみを自分の一部として認めることができれば自分への慈悲が生まれ、その慈悲のエネルギーは自然と周りの人々へ広がっていきます。観音菩薩様とはお寺にお祀りされている像ではなく、人々の苦しみに深く耳を傾け、苦しみを和らげたいと願う慈悲のエネルギーそのものです。

ティク・ナット・ハン禅師が拠点を置くフランスのプラムヴィレッジには毎年何千もの参加者が世界中から集まり、共同生活の中でマインドフルネス（正念）の実践を習得します。リトリート／瞑想合宿というと日本の接心のように長時間坐禅することが強調されるように思われがちですが、ここでは人々と触れる時間が大切にされています。もちろん禅寺ですので早朝起床後、まず皆が禅堂に集まって坐ります。しかし、瞑想は禅堂



にたどり着いてから始まるものではありません。目が覚めた瞬間からすでに始まっています。身体をゆっくりと起こし、数回深く呼吸し、自分に今日また新しい一日が与えられた奇跡に感謝し微笑みます。床からお手洗いまでを一步一步、禅堂で経行を行うように意識して呼吸と調和して歩きます。そのようにして禅堂につけば心はすでに落ち着いていて、坐禅瞑想はすでに始まっている瞑想の延長となります。坐禅を終え、禅堂を出てからもマインドフルな状態を保ちつつ一日を過ごします。心の静けさを保つことで、自らの心身に深く耳を傾けることができます。同時に周りの人々にも耳を傾けることができるようになります。

誰しもが『聴いてもらいたい』という思いを持っています。特に震災後など、大変な状況におられる方々は自分のストーリーを聴いてくれる人を必要としています。一人一人にストーリーがあり、またグループの中でお互いの話に耳を傾けているうちに悩み苦しんでいるのは自分だけではなく、皆同じ苦しみを抱えているんだ、と気づき、その瞬間慈悲の心が光り輝き、暗闇は薄れていきます。

震災後約1年半が経過。世界中から仮設住宅へ十分な物質的支援が集まり続けています。でも心の傷の癒しはこれからです。「深く聴いて癒す」。僧侶やカウンセラーでなくても誰でもができることです。

プラムヴィレッジのHP／ www.plumvillage.org



… 海外レポート …

ハワイ特集

ハワイ祭り太鼓

「ハワイ祭り太鼓」は、現ハワイ総監駒形宗彦師夫人・駒形フェイ氏によって、1984年に設立され、子供から大人まで多民族のメンバーを含む国際的なグループへと発展してきました。和太鼓（ドラム）のグループとしてはハワイ州では初めてのグループで、伝統的な日本の楽曲のみならず、最新の楽曲も含めた多彩なレパートリーを併せ持ち、その演奏スタイルは西洋と日本の双方のスタイルを融合したとてもエキサイティングなもので、ダイナミックで力強い日本文化を表現し伝えています。

「ハワイ祭り太鼓」もすでに設立から30年近い時間が経ち、その演奏スタイルや楽曲を新たなものに革新していく時期をむかえています。この太鼓グループの最初のメンバーは、駒形宗彦師、フェイ、大修、修二のワヒアワ竜仙寺の家族のみでした。しかしこの太鼓の音は、仏陀の声、そして教えとなってお寺の外に響き、それを聞いた多くの人たちを魅了し、彼らはグループの新しいメンバーとなっていきました。彼らの多くは仏教徒ではありませんでしたが、太鼓を打ちながら、仏教の基本的な教えに徐々に親しみ、それを受け入れていきました。

カアラ日本語学校の生徒とワヒアワ竜仙寺のメンバーが集い、駒形フェイ氏（ミセス・K）の指導のもと、最初の太鼓のクラスを始めたのは1982年のことでした。これが「ハワイ祭り太鼓」の前身であり、2年後の1984年からこの太鼓のグループは、正式に「ハワイ祭り太鼓」として活動を始めました。週に6～10時間、ランニング、坐禅、腹筋、腕立て伏せ、太鼓のトレーニングをワヒアワで行いました。この

ワヒアワの地は雨が多く、周りを湖やパイナップル畑、そして空軍基地に囲まれています。太鼓や古タイヤを使って屋外で練習する時などは、その周りの山々の景色もとても美しいものでした。

太鼓の演奏者は、太鼓の音が自分自身の活気に満ちたエネルギーの一部として、自分の内から出されているということを学びました。「ワヒアワの雷鳴（ハワイヘラルド・1986）」は、そんな演奏者のエネルギーと魂を一つにまとめ合わせたもので、それはそのまま仏陀とハワイの人々との共鳴であり、また、演奏者と聴衆が一体となり、双方の心に響き魂に触れるものであったのです。

この太鼓グループは他から金銭的な援助を受けずに、お寺にある太鼓や古タイヤを使って練習を続けていました。寄付や公演などで得た収益は、太鼓を購入したり、作ったりするための費用や、演奏旅行の費用に充てていました。「ハワイ祭り太鼓」は、徐々にハワイやアメリカ本土、そして日本での演奏を通して、青少年和太鼓グループとして知られるようになりました。

その後、太鼓のワークショップ、トレーニングや、公演のために各地を巡り、サンノゼ太鼓グループ、ケニー遠藤グループ、大江戸助六太鼓、音太鼓座等の他の多くの太鼓のグループと親交を深めていきました。このような演奏のためのツアーでは、お寺や知り合いの家に宿泊するのが普通です。「ハワイ祭り太鼓」のメンバーは、多くが曹洞宗の信徒ではなかったのですが、段々とお寺というものに慣れ親しみ、盆踊りやお寺のイベントで演奏する時は全員がお焼香



ハワイ別院正法寺寺族、
ハワイ祭り太鼓ディレクター・リーダー 駒形フェイ氏



をして、法要等にも参列するようにしていました。

また、「ハワイ祭り太鼓」は自分達のみで公演するだけでなく、他のグループとも一緒に練習や公演をし、さらにハワイの踊りや音楽を太鼓とジョイントしたり、独自の音と文化を創り上げていきました。「ハワイ祭り太鼓」の“oli”という曲は、ワヒアワの山々と平地の印象的な美しさを現したものです。仏教の法要でも、時として太鼓は取り入れられ、その強力なビートは読経とも相まって、それを聞く人に感動を与えます。

「ハワイ祭り太鼓」は、ワイキキで1997年に催されたバン・パシフィック太鼓フェスティバル（近鉄インターナショナル主催）で、日本からの太鼓グループと共演した唯一の地元の太鼓グループでした。またハワイ太鼓フェスティバルのイベントでも、他の様々な太鼓グループが公演する中、主演を務めた最初の地元のグループでした。

その期間の他の主な公演は、1996年のワイキキ・シェルでのピーター・ムーンのブルーハワイアン・ムーンライト・コンサート、1995年のカリフォルニア・パークレーでのサンフランシスコ太鼓道場インターナショナル太鼓フェスティバル、同年ハワイ大学でのピーター・ムーンの第25回カニカピラ・コンサート等があり、また、1994年のシアトルでの太鼓フェスティバルにも出演しました。

カリフォルニア州、オレゴン州、そしてワシントン州へのツアーでは、サンノゼ太鼓グループとのだるま祭り、盆踊りフェスティバル、日系2世ウィーク・フェスティバル等での公演を行いました。1992年には、ディズニーマールドのエプコットセンターで演奏し、1990年には日本の長岡・新潟祭りで公演をしました。また近年では、日本の長野市で木島太鼓とサンフランシスコ太鼓道場と共演しました。さらに、テレビのスペシャル番組にも出演し、グループのメンバーはインタビューを受けました。

夏のお盆の季節には、通常のレパトリーに加えて、盆踊りの曲やハワイの福島音頭を演奏します。ハワイでの公演は、コンサートをはじめ、お盆のような特別なイベントで

演奏します。例えば、ベン・カエタノ氏のハワイ州知事就任パーティ、百大隊50周年記念、アロハフェスティバル（オアフ、ハワイ、マウイ、モロカイ）、ワヒアワの桜祭り、ポルトガル&沖縄フェスティバル、ハワイ祭り、コナ・コーヒーフェスティバル、日系移民100周年記念式典、センテニアル・セレブレーション、ハワイ・日米協会、アジア・太平洋審議会、ビショップ博物館、クアキニ病院、ハワイ・プランテーション・ビレッジ、日本領事館等の様々なイベントで演奏しました。また、コナ大福寺の太鼓グループや、マウイ太鼓、ケニー遠藤、善心太鼓などの他のグループとも共演しました。

「ハワイ祭り太鼓」は、長年にわたり、ハワイのアメリカ本土の他の太鼓グループや、地域のイベント、他のお寺の太鼓グループ、およびハワイの学校や大学のために太鼓のワークショップやデモ演奏を実施しています。小学生は、太鼓の入門クラスを体験することができ、また、ホノルルやミリラニやワヒアワの地域では、子供だけでなく大人も参加できる通年の太鼓クラスを設け、太鼓の指導を実施しました。さらに、ハワイの各島にある太鼓グループで構成するハワイ太鼓協会が、駒形夫人によって設立されました。

「ハワイ祭り太鼓」のメンバーの中には、もう25年以上も演奏を続けているメンバーもいます。そのようなメンバーは、グループのリーダーとなり、新しいメンバーに太鼓の指導をしています。

ノーラン宮原氏は、サンフランシスコ太鼓道場の国際太鼓フェスティバルに、幾度も出演したり、駒形修二師は、大学時代に太鼓の訓練を受け、日本の浅草の日本太鼓道場や、カリフォルニア州サンフランシスコ太鼓道場のメンバーとしても演奏し、「ハワイ祭り太鼓」が演奏する楽曲や、他の太鼓の楽曲を作曲したり編曲したりしています。彼は今、アイエア太平寺の住職で、妻のジェイミーと染井太鼓グループを率い、様々なイベントで演奏をし、また「ハワイ祭り太鼓」も協力し合っています。

この、ノーラン宮原氏と駒形修二師の二人は、現在の





「ハワイ祭り太鼓」の中心的指導者で、ハワイ州内のいたるところで太鼓ワークショップ等を実施して、他の太鼓グループも指導したりしています。

2012年2月に「ハワイ祭り太鼓」は、ハワイ別院・正法寺の仏像、観音様、道元禅師像、瑩山禅師像の前でコンサートを行いました。それはとても穏やかな風が別院のドアを通して流れてくる夜で、御香の香りもその風のにり、その場全体を柔らかく包んでいました。ニューヨーク太鼓座のマルコ・リエンハード氏による尺八のメドレーは、魔法のような時間を演出し、「荒城の月」の演奏では、その尺八に歌、琴、日本舞踊も加わり、深い郷愁と過去の良き時代を存分に表現していました。グラント村田氏と彼のグループによる沖縄の懐かしい歌や楽曲のメドレーは、島国の人々の生活様式と、強さ、そしてロマンをよく伝えていました。駒形

フェイ氏と、マルコ・リエンハード氏による“ホレホレ節”は、ハワイの日系移民の先駆者たちの苦勞と、よりよい未来を目指した彼らの夢と希望を表現し伝えていました。

「ハワイ祭り太鼓」の力強い太鼓の音と、ゲストによる素晴らしい演奏が別院中を心地よく満たしたこの日は、来る2013年10月に予定されている曹洞宗ハワイ別院創立100周年記念法要に向けて、これから開催される様々な記念行事の幕開けに相応しい一日でもありました。

「ハワイ祭り太鼓」の公式のロゴ・マークは、太鼓と太鼓の演奏者、自然と宇宙の調和、過去と現在、人々と文化を繋ぐハワイの美しい虹、激しい波と火山の炎、そして、時の流れや、絶え間ない変化といった自然の力によって地球は常に変動しているのだということを表しています。

世界最古の楽器である太鼓は、自分の体を介して反響音を生成します。この太鼓の音を通して、世界平和を願い続けていくことは「ハワイ祭り太鼓」の使命でもあります。そして、「ハワイ祭り太鼓」の演奏者は、力強さと美しさ、さらにメンバー同士の絆を示し、この絆はエネルギーな演奏、太鼓、演奏者、聴衆、全てが調和し一体化することを意味しています。

「ハワイ祭り太鼓」は、30年という長い期間にわたり、ハワイだけでなく世界とその太鼓の音と音楽を共有してきました。この太鼓の音は、いうまでもなく仏陀の声、そして教えであり、これからもより一層明確に魅力があるものになり、さらなる平和と調和を呼び掛けていくでしょう。

※英文の原稿を事務局にて和訳いたしました。

警察の教誨師として

アイエア太平寺 国際布教師 駒形修二

私は、今、ハワイ国際布教師としてオアフ島のアイエア太平寺にて、葬儀、年回法要、結婚式等の儀式を司祭し、またそれ以外にも、各種行事や様々なイベントを催しお寺の護持、運営に尽力させていただいております。

今から5年ほど前ですが、ホノルル市警察から、警察官の心と精神のケアをするために警察の教誨師を務めてほしいという依頼がありました。私達が暮らすこのハワイ州は、アメリカ合衆国の中でも最も安全な州のひとつです。これは、ひとえにハワイ州内を守る警察官の弛み無い努力によるものといっても過言ではありません。ホノルル市警察の警察官の訓練の厳しさは、アメリカ合衆国の都市警察の中でも、トップクラスの水準にあります。それゆえ、警察の教誨師になることさえも、容易なことではありません。

私は、まず、何回にもわたる面接や審査を経て、ホノルル市警察の70名の新人警察官と一緒に、6カ月以上もの期間にわたる研修を受けました。僧侶としての仕事との両立はとても大変でしたが、なんとかこの厳しい研修を終え、オアフ島内では、最も忙しくそして広い第3地区の担当になりま

した。教誨師としての私の仕事は、この第3地区を管轄している警察署を訪ね、そこに勤務している警察官と話をすることです。また、パトロールにも同行します。パトロールに同行する時には、私も警察官と同じ制服を着て、防弾チョッキも身につけます。ただ、銃だけは携行しません。なぜなら、教誨師は聖職者であるので、武器を保持しないからです。

警察官の仕事というのは、いつ何時でも、とても“縛られている”ものです。なにか事件が起これば、プライベートな時間は全くなり、また、常に危険とは隣り合わせです。そんな理由からか、彼らは自分の感情を表に出すことを極端に嫌い、またとても感受性が強く、傷つきやすいのです。

そんな彼らにとって、私との会話は、警察署に所属している精神科医との会話とも違い、ある種の特別なものであると思います。教誨師とのすべての会話は、守秘義務によって守られ、また、これまでも同じ研修を受け、同じ体験を共有し、パトロール等でも同じ時間を過ごすことが多いので、彼らは自然と心を開いてくれるのです。このような教誨師の役割は、警察署において極めて重要で価値のあるものだ



ハワイ警察の制服を身に着けた駒形修二師

思います。

今、ホノルル市警察には、6人の教誨師がおります。私達は、警察官に教えを説いたり、自分達の宗教を押しつけたりすることは決してしません。ただ、彼らの話を聞いてあげるのです。そして、もし意見を求められたら、その時は私達の意見を話します。これは、特定の宗教や宗派に依らない精神的なサポートであり、私達は一人の聖職者として、彼らのすぐ傍に何時でも存在していることを意味しています。

私は、これまでも幾度となく警察官の心をサポートして参りましたが、最近、ホノルル市警察の警察官が殉職する悲惨な事故がありました。2012年の1月21日の午後8時10分に、高速道路上で立ち往生していたドライバーを助けようと

した警察官が、事故に遭ったのです。その警察官は、高速道路上で停車中のパトカーの運転座席に座っていたのですが、そこに時速90キロで走っていたトラックが衝突したのです。緊急連絡を受けた別の警察官が、すぐにその事故現場に駆けつけたのですが、その事故で怪我をした警察官は、押しつぶされた運転座席に閉じ込められてしまっており、車もひどく炎上していたために、救出することはできませんでした。私達、教誨師も全員が、事故後1時間以内にその現場に駆けつけ、その後、警察署に戻り警察官たちを慰め、元気づけておりました。

その日の夜遅く、私は、事故現場に最初に駆けつけた警察官と一緒に、警察署内の暗い会議室で坐禅をしました。偶然にも、彼は私と研修を一緒に受けていた同僚だったのです。私達は坐禅をした後、彼が目当たりになった悲惨な事故の状況、そして、仲間の警察官を救うことが出来なかったという彼の罪の意識、また、そんな状況下でも被害が拡大しないように、炎上するパトカーに近寄らないように他の者を制した彼の勇気ある素早い行動など、色々なことを話し合いました。私は教誨師として、ずっと彼の傍におり、そして、彼の心は次第に落ち着きを取り戻していったのです。

今日、彼は元気にパトロールをしています。私は、彼の一举手一投足を見えています。彼は、あの事故の晩、私が一緒に坐禅をしたことを、とても感謝してくれています。

それが、私の仕事であり、私は警察の教誨師なのです。

※英文の原稿を事務局にて和訳いたしました。

大陽寺の活動

ワイパフ大陽寺 寺族 穀 蔵 隆 子

大陽寺の活動は1年間の宗教行事と合わせて文化活動も取り入れて行っています。3月には雛祭り、5月には端午の節句、7月には七夕祭りなどです。

雛祭りにはお雛様を飾り、雛寿司やチチだんごを作りお供えします。端午の節句には鎧や兜一式に金太郎、桃太郎、二宮金次郎などの人形を飾り粽（ちまき）をお供えして男の子の成長を祈ります。

七夕には短冊におおの祈りを書いて、折り紙と一緒に飾り、青竹で素麺流しをして食べたりして、日本の伝統的な行事を行い、日本の良さを再認識し、大事にしています。

婦人会の活動は手芸クラス、精進料理クラスなどで、手芸クラスでは知っている人がお互い先生になり教えあって、それぞれの生きがいを見つけ和気藹々に活動しています。

ほかの活動としては、墨絵、書道を同好者を集め指導しています。そして、勉強した成果の発表の場として毎年、盆踊りの時に展示会をして、体験コーナーも設けて子供も大人も参加できるようにしています。

今、子どもの習字クラスにはメンバーのひ孫さんがきてい

ます。習字を始める前にはイス坐禅を薦めていて姿勢を正しくすることを大事にしています。

子どもたちは未来への架け橋、そのお手伝いを出来る幸せを感じています。

合掌



大陽寺の文化活動。書道クラスには小さい子どもの姿も見られる

バザーを通じて菩提心を育む

マウイ満徳寺 国際布教師 おやまけんし 大山 健治

毎年3月に入るととてもドキドキします。それは期待が高まる気持ちと、不安がいっぱいある事の両方から生まれるドキドキ感です。なぜドキドキするかというと毎年恒例のバザーが近づいてくるからです。

私が現在着任しているマウイ満徳寺では「バザー」という大掛かりな行事を35年間やり続けていますが、これはお寺にとって欠かせないイベントの一つです。バザーはお寺の運営資金集めに大きく貢献していますし、大勢の人がお寺に足を運んで、満徳寺や仏教、禅の事に興味を持つ良いきっかけになる場でもあるからです。

バザーを通して、仏教の大事な教えが育まれている場になっているようにも思います。その一つに、「布施」という教えがありますが、大勢の方々が家で使わない物やいらなくなった物、遺品など、いろいろな雑貨や衣類、電気製品や家具をお寺に寄付します。そして、食べ物を作る食材、野菜や植木、花や手作りのクラフトも寄付して頂いています。バザーで売る物は、殆ど寄付された物で成り立っています。要するに、皆さんの布施の気持ちがいっぱい詰まっているイベントなのです。

そして、お世話になった物を大事にする感謝の気持ち、

自分が使わなくても、他の誰かが必要かもしれないという思いやりの気持ち、ゴミ処理場に余分な物を置かないようにと環境を大切にする気持ちも、バザーを通して自然と育まれていると思います。

そして、寄付された品物に値段を付ける大変な作業がありますが、これをやっている则一人一人の物に対する価値観の違いという事に気づかされます。人も物も本来はすべて値段なんか付けられないという事を身にしみて実感をします。仏様の目線から見れば、人も物も「上」や「下」は無いという事を感じさせられます。

また準備や片付け、料理を作るために手伝いに来てくれる人は、自分で何が出来るか、どの様に役に立てるかを自分なりに考え、一生懸命作業をしてくれます。このように、様々な事をやっている大勢の方々が一つになっている姿には本当に感動します。この様子がまさに精進を表しています。

そして一番大事な事は、物を買いに来る人も、手伝いに来てくれた人もバザーを楽しむことが出来ているという事です。お寺で笑顔をたくさん見ることが出来て、笑い声がいっぱい聞こえて、幸せを感じられることが何よりも最高な事だと思っています。

大福寺におけるファミリー・日曜サービス：「仏種を植える」

ハワイ大福寺 庶務担当 なかでしこう 中 出 慈 光



お年寄りから小さい子どもまで、まさに大福寺ファミリー

日曜日の朝9時半にお寺の鐘が鳴らされると、お参りに訪れたファミリーの皆さんがお寺の回廊に集まり、合掌低頭をしたのち本堂へ上がります。ご本尊釈迦牟尼仏の御前でお香を供え、観音堂に集まります。

観音堂では観音様に向かって半円を描くように座布団の



音楽も楽しみながら。ウクレレを弾いているのが中出師

上に座り、日曜サービスの始まるのを待ちます。お堂の中には子どもはもちろん、子どもの親や祖父母、親の背にもたれかかる幼な児もいます。皆、仏さまの御教えを聞きに集まって来ました。

私が「Good Morning！おはようございます」と声をかけ



観音堂のカーペット貼りのフロアで坐禅をします

ると共に二人の子どもが一步前に出て、「観音様のお祈り」をリードします。「今、私たちはここに立ち、蓮の花が開くように、生きとし生ける全てのものと共に、あらゆる命を敬い、欲望を離れ、観音様の光を仰ぎます」。次に親の一人がベトナム禅僧ティック・ナット・ハン師による偈文を唱えます。子どもたちはお祈りや偈文に合わせて体を動かし、ヨーガへの準備に入ります。

いくつかのヨーガのポーズを通して、子どもたちは心の集中力を身に付け、体を落ち着け、心と体のバランスを自然に養います。仏法僧への敬いの心を込めて「Vandana Ti-Sarana」を唱えた後に着座し、サービスの中心をなす坐禅、お拝、読経へと続きます。

私が「お釈迦様のように坐ろうよ」と呼びかけると子どもたちは足を組み、手を組み、静かに坐ります。じっとしている子もいれば、もぞもぞする子や笑いをこらえる子、母の背中で寝ている子もいます。キョロキョロしている子はじっと坐っている自分の親の姿を見つけます。

日英両語で『延命十句観音経』と読経に続く回向文を唱えますが、空で唱えているのは数年間お寺に通っている子どもたちです。ダルマティーチャーの弾くウクレレの伴奏に合わせて歌を唄い、法話に耳を傾けます。現在、ダルマティーチャーはお寺のメンバーでもある禅僧の玄定^{げんてい}ディードリクス師で、法話のテーマは四諦、八正道、そして六波羅

蜜です。

全員で立ち上がり「Shyomyo」を唱え、堂内を片付け、庭に面した回廊でおやつを食べたのち日曜サービスは終了となります。おやつをいただく前には食前の「Mealtime Meditation」をお唱えします。

年に一度、大福寺ファミリー・サンガは遠足にでかけ、またビーチでの楽しいピクニックに行きます。また昨年は11月に行われる感謝祭の前日に、宗教、宗派を超えた集まりであるInterfaith serviceにおいて歌を披露しました。

仏法僧への帰依。親、指導者、友人に対する深い愛情と敬意。安心して訪れることができる心暖まる場所。これらがこのお寺に集う人々の拠りどころとなっています。

※英文の原稿を事務局にて和訳いたしました。



編・集・後・記

今号の特集の編集に迈り、改めて諸先達の軌跡をたどることとなりましたが、目の前に現れたのは、会報50号分に残された貴重な国際布教の記録でありました。

キャリアもなくやっとの思いで編集に携わっておりますが、この歴史の継続に今後も努めたいと思います。ご指導よろしくお願いいたします。

慧真九拝

CONTENTS

▶巻頭	僧堂安居の充実発展を願う……………大本山總持寺副貫首 最乗寺専門僧堂堂長 石附 周行	1
▶特集	S Z I のこれまでとこれから	
	(1) S Z I タイムライン ～発足 20 周年に向かい、これまでの活動を振り返ってみます～ ……………	2
	(2) 私が考える「S Z I のこれまでとこれから」……………	7
	(3) 両大本山修行僧が考える国際布教 ～両大本山ワークショップ 感想文から～……………	14
▶SZI express	会費納入者・賛助金納入者名簿／動静報告／S Z I ホームページのご案内 ……………	16
▶海外レポート		
	オランダ「ZEN RIVER 禅川寺」僧堂開単法要……………静岡県慶昌院住職 磯田 浩一	17
▶国内レポート		
	プラムヴィレッジ シスターらの被災地訪問 深く聴く……………プラムヴィレッジ シスターチャイ	18
▶海外レポート		
	ハワイ特集……………	19